

おぼろいっすの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

戦後70年、「らいてうの約束」を果たすために

NPO平塚らいてうの会会長 米田佐代子



「平和」と「人権」の宣言から70年

今年には戦後70年、日本では東京大空襲・沖縄戦・被爆70年であるとともに、1931年以来アジア・太平洋地域で戦争を続けてきた日本が、ポツダム宣言を受諾降伏、民主化政策による女性参政権実現から70年の節目の年です。

世界的にみればファシズムのドイツ・イタリア・日本に対する反ファシズム連合が勝利した第二次世界大戦終結の年であり、国際連合が発足、「われらの一生のうちに二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い、基本的人権と人間の尊厳及び価値と男女及び大小各国の同権とに関する信念」をかかげた国連憲章誕生から70年でもあります。1945年は、「平和」と「人権」わけても「男女平等」が世界の共通の約束になった年でもありました。

戦争が終わったとき、らいてうは59歳でした。それからおよそ4半世紀、1971年に85歳で亡

くなるまで憲法を守り、戦争のない世界を訴え続けたのです。没後44年の今、そのねがいは今覆されようとしています。来年はNPO平塚らいてうの会創立15年、らいてうの家オープン10周年です。今年を「らいてうの約束」の年にしましょう。

世界の希望、「九条」と「二十四条」

「日本人人質事件」で問い直されたのは、世界に認められてきた「日本は戦争しない国」のイメージがゆらぎはじめたということでした。安倍首相は「戦後70年談話」を出すそうですが、このうえ「戦争の反省もしない国」と言われたら、世界に顔向けができなくなってしまうでしょう。

日本国憲法九条は、集団的自衛権はもちろん「個別的自衛権」といっても武力行使することを認めています。「自衛権はどの国にもある」という声がありますが、らいてうは「国家に戦争する権利はない。安全保障は軍事力ではなく平和外交で」と考えました。それを実現するには、女性が平和をつくる主体にならなくてはならない。自分も戦争体験を経て、「日本の女性が戦争を止めることができなかつたのは女性に権利がなく、真実を知ることができなかつたから」と実感した彼女は、戦後主権者になった日本の女性が自ら学び、考え行動しようとする主張したのです。

日本国憲法二十四条の「両性の平等（今では性は男女の別だけではありませんが）」は、九条を支える土台なのです。「女性がつくる平和」は、今や国際的な流れになっています。

10年目のらいてうの家で「らいてうの約束」を今年にはまたNPT（核不拡散条約）再検討会議の年です。5年前らいてうの会は代表をニューヨークに送り、「らいてう、ニューヨークに行く！」と核廃絶を訴えました。今年には行けません、「らいてうの約束」である「核も戦争もない世界」実現をめざして5月23日に総会を開催、らいてうの家も4月25日オープンです。「野の花、野の鳥」を愛したらいてうを想いながら平和を語り合います。みなさんのおいでをお待ちしています。

第16回通常総会のご案内

- 日時 2015年5月23日（土） 13時半～
- 会場 東京ウイメンズプラザ第2会議室
- 議題
 - ①らいてう生誕130年をめざす準備
 - ②14年度事業報告と決算報告
 - ③15年度事業計画（案）と予算（案）
 - ④役員選出
 - ⑤その他

らいてうの家オープン 4月25日（土）

- 11時～ オープニングコンサート
- 鈴木かおり（歌）とブリッジトリオ
- 11時40分～ 春の茶席（宮島社中）

戦後70年によせて：国策の満蒙開拓団

上田らいてうの会会長 杉山 洋子

明治以降、世界に羽ばたこうとした日本は、海外に日本の拠点を展開したいと移民政策をとり、昭和7年、満州国を打ち建ててからは、日本人を移民として送り込むことに躍起となった。当初、反対論（高橋是清等）もあつたが、やがて国策として正当化され百万人移動計画が立てられた。

昭和20年5月の統計では全国で開拓団員22万359名、青少年義勇隊員10万1514名、計32万1873名となっている。このうち最も多いのが長野県で、開拓団員3万1264名、義勇隊員6595名、計3万7859名という。こんなに大勢が送り込まれた理由は、大正3年の信濃教育会総会で海外発展主義教育を五大教育方針の一つに、小中・師範学校の生徒たちに海外思想を教え込み、率先して満州移民の素晴らしさを説く校長たちが現れたことによる。当時世界大恐慌の余波は農村にも波及しており、国策を歓迎する人々も現れた。この頃、私の祖父澤柳兼十郎は下伊那郡上久堅村神稲小学校で教員をしていた。上久堅村は昭和13年から村を挙げての開拓熱で、満州に分村を作るといふ騒ぎになり、次々と数家族ずつ渡満して行った。祖父は村長の勧誘に乗り、17年4月一家6人を連れ他の家族30人と共に渡満した。このとき「お前たちも一緒に行こう」と塩尻にいた我が家へ祖父が勧誘に来たのを覚えていた。母は「戦争が始まっているのに、よその国へ行って働くなんて絶対ダメ」と泣いて反対、おかげ

で我々はいまだに生きています。祖父は59歳。父は2番目の弟をわざわざ名古屋まで行って説得し、娘2人と12歳の息子、5歳の孫までも連れて行った。この開拓団は最終的に208戸838名の村となって2年ほどは楽しく過ごしたようだが、20年になると戦況悪化、男は次々と召集され、8月1日父の弟もついに召集。18歳以上50歳までの男はどこの開拓団にも一人もいなくなった。

苦難の帰国路

15日終戦。頼りの関東軍は皆逃げてしまい、根こそぎ動員された新兵だけが国境へ送られた。老人と女子どもだけの集団が広い荒野を逃げまどい、次々と死んでいった悲惨さは誰も語りたがらない。祖父は20年12月19日に濃河鎮で亡くなった。63歳。叔母の一人も同じ所で21年1月8日亡くなっている。22歳。もう一人の叔母は錦州市北までたどり着きながら帰還船に乗る寸前で10月7日に亡くなった。28歳。16歳の叔父と9歳の従兄は10月末に帰国した。徴兵された叔父はシベリアまで連れて行かれたが、幸運にも21年初めに帰された。上久堅村の帰国者は838名中190名ほどである。やっと帰国した人々も全財産を処分していたので住む場所もなく生活に大変苦労した。菅平高原に昭和21年以降開拓に入った人々も満州からの引揚者が多い。今年79才になった従兄は言う。「偉い人たちは先が見えるからすぐ逃げ出せるが、俺たち虫けらは、まわり中に野火が燃え広がってこなければ危ないってことがわからないのさ。わからせないようにさせられてるってことかな」と。85歳の叔父も元気に暮らしている。

鎮魂・反省の旅

わたしは1986年10月、方正県にある日本人公墓へ行ってきた。ソ満国境から逃げてきた人々がここで収容所へ入れられ、寒さと飢えで大勢亡くなった。麻山地区では500人の集団自決があつた。それらの人々の遺体を弔つて中国の政府で建ててくれたのが「日本人公墓」である。ここで参加者全員で「信濃の国」を歌い花輪を供え祈りをささげた。戦時中の行いを反省したところから出た、信濃教育会主催の慰霊と鎮魂の旅である。

私たちがハルピンの奥地にある方正迄来ると聞いて残留婦人たちが20名以上集まってきた。（上の写真）中には3日もかけてバスで来たという方もいた。中国人の妻となり日本へは帰れないという方々ばかりである。一緒に募参りをした後、宿で交歓会をした。私たちの持参した日本の菓子などを大変喜んでくださった。満州へ来て40年、一度も風呂へ入っていないという婦人の首筋に黒く



こびりついたものを見て何とも言えない心地になった。二度と繰り返してはいけない歴史。二度と武器を持って人を殺めることのない国を維持しなければ・・・とつくづく思う。らいてうさんの言うように「世界が一つの国」になれる方法はないものだろうか。

追悼 奥村敦史さん

2015年1月31日、平塚らいてうご令息奥村敦史さんが、九七歳で逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。



2007年10月、らいてうの家に来館された奥村敦史さん、綾子さんご夫妻 (前列右から2人)

らいてうは曙生さん(1915年生れ)と敦史さん(1917年生れ)の二人のお子さんに恵まれました。らいてうの母性の主張は、この妊娠・出産・育児の体験に基づいています。なかでも敦史さん出生後すぐ徹夜で原稿

を書く仕事をしたあと、母乳がまったく出なくなつてしまった痛切な経験が、与謝野晶子らとの母性保護論争のきっかけの一つとなつたことは有名です。
小さいころは敦ちゃんとか敦坊とか呼ばれていたようですが、「お母さんはなぜ原稿を書く人になつたの?」と、なかなか遊んでくれない母に不満も言っています。田端に住んでいたころ、二階で仕事をしている母が降りてくるのを待って「階段から落っこちた」こともあつたそうです。
上田の「らいてうの家」は、敦史さんからら

てうの会に土地を寄贈していただいたことから始まりました。開館後の2007年10月13日、敦史さん、綾子さんご夫妻が雅史さん(敦史さんの三男)の運転で来館されました。のちに「自然との調和も見事・行き届いた諸設備、陳列の品々」などとお褒めのお手紙を頂きました。今はらいてうや博史さんと一緒に、「家」の様子を見守っていただくさることと思います。
ご冥福をお祈り申し上げます。
(折井 美耶子)

充実の「新雪スノーシュー」と「上田の自学精神の学び」

3月1日、2日と「上田の街探検とスノーシュー」を実施。1日は大正デモクラシー期のうねりの中で生まれた信濃(上田)自由大学と山本鼎の自由画教育について学びました。上田・真田会員も含め25名の賑やかな会でした。
2日の午後の「サントミューゼ」での山本鼎展の研修と相俟って、上田で育まれた芸術活動と、聴講生の資格に一切の制限を設けないという自学精神に触れることができました。エレン・ケイの思想にもつながる内容でした。



「山本鼎の思いが今の上田に生きている、さらに上田を学びたい。」との参加者からの感想がうれしかったです。

2日は前日の降雪の後の清々しい晴れ間となり、くつきりとした青空に輝く雪、春を思わせる陽射しを背に森を歩きました。38万戸に及ぶ停電で松本からの参加者が到着できず残念でしたが、参加者15名、3月に入って雪も締まり歩きやすいよい時期でした。木立の陰が雪面に写り、木々の枝の様子や鳥の姿もはっきり見える楽しい冬のウォーキングを体験できました。ふわふわの新雪を練乳とジャムでいただくシャーベット、新雪の上に大の字に寝ころび、冬の森遊びを満喫できました。
(若尾 伸子)

森の講座Iへのお誘い

6月14日(日) 15日(月)

春の山野草と

森の芽吹きを楽しむ花童子ハイキング

2日目は山菜採りを楽しみましょう。

昔語りの会 7月4日(土) りいてうの家

長野県の三婆と自任している三人が語る

「戦後どんな活動をしてきたか」

紀要8号 6月刊行予定

奥村直史さんによる「らいてう俳句」、永井路子さんに聞く「黒板サキの思い出」、米田佐代子さんの「らいてうと世界連邦」ほか、今年も興味深い資料や論考を多数載せます。乞うご期待を。

らいてうの会 スウェーデンの旅で

旅一番の思い出

それは、エレンの生家そして晩年のストランド荘の両方を訪ねたことです。生家はマレン湖畔にゆるく広がる緑の中の白い美しい家でした。私たちがほかに人影はなく、かすかな風を感じながら家の周囲を散策しました。朽ちかけた小さな栈橋に佇む人、大木を見上げ語り合うグループ、屈んでヒースに手を伸ばす人、思い思いにすごしました。異郷から突然訪ねたのに、いつの間にか寛いでいました。

前の日に訪ねたストランド荘と生家の外観や地形はやや違うものの、ふたつの家はどこかそっくりと感じました。きっと、エレンはこの地でとても温かな子ども時代を送り、幼い日に育まれた心の灯火は生涯彼女を支えたのではないかと想像しました。

旅のあとでー ウプサラと蘭学

ウプサラで、リンネ

植物園・博物館を見学しました。ここには、和風の植物が多く、博物館の一隅に、日本語混じりの植物図鑑



(?)のページのコピーが飾ってありました。それは、レンゲシヨウマの絵と解説だったように思うのですが、カメラは電池切れし、メモ帳には「リンネ、日本に来た弟子」と書いてき

ただけでした。

今になって調べますと、「弟子」とは「ツンベルク」。スウェーデンの植物学者・医学者で、ウプサラ大学に学び、のち同大学教授・学長。ウプサラ大学図書館には、日本の蘭学者中川淳庵・桂川甫周らがオランダ語で書いた手紙それも帰国したツンベルクに送った手紙が保管されている。(えっ、気が付かなかった・・・嗚呼) ツンベルクはアジサイ・ハマナス・大黒屋光太夫とも関係があるそうです。

【ツンベルク豆知識】

ケンペル・シーボルトと合わせて『出島の三学者』とよばれています。彼が来日した1775年は『解体新書』が出版された翌年で、中川淳庵・桂川甫周らと深く交流、淳庵にはケンペル著『廻国奇観』を贈りました。帰国後のツンベルクが著した『日本植物誌』はシーボルトから伊藤圭介に贈られ、1829年、伊藤は『泰西本草名疎』を著しました。

旅のあとで2 絵本「イエータ運河を行く」

忘れがたいヨータ運河クルーズでしたが、日本語の絵本を見つけました。

『イエータ運河を行く』 深井節子 文・絵 福音館・たくさんのふしぎ

(1993年6月号、第99号)

北ヨーロッパでは塩がとれないそうで、びっくりしました。ただし、「ヨータ運河II塩の道」とは明記されず、「スウェーデン・ヨータ運河・塩」の関係は、私の中ではまだ五里霧中です。

(佐治 悦子)

【事務局日誌】

- 1月10日 臨時理事会開催
- 1月28日 らいてう関係資料整理作業
- 1月30日 第3回常任理事会
- 2月3日 「家」企画展示担当者会議
- 2月13日 第6回理事会開催
- 会ニュース編集会議
- 2月19日 16年記念実行委員会事務局会議
- 「家」企画展示担当者会議
- 3月1日～2日 蚕都上田の町巡りとあずまや高原スノーシュー
- 3月5日 「家」企画展示担当者会議
- 3月6日 らいてうブックレット製作担当者会議
- 3月19日 紀要8号編集会議
- 3月23日 16年記念実行委員会事務局会議
- 3月31日 第7回理事会開催

品切れになっていた岩波文庫「平塚らいてう評論集」が、重版されることになりました。ぜひ、会へお申し込み下さい。家でも購入できます。

今年のらいてうの家企画展示は

「戦後70年、らいてうの平和への思い」をテーマ展示します。

訃報

上田らいてうの会の平尾ひで子さんが昨年12月28日、92歳で逝去されました。歌人として活躍され、長い間地元の会を支えて下さいました。ご冥福をお祈りいたします。